

## 唐土の八仙と『南総里見八犬伝』

神田 正行 (明治大学)

【キーワード】 曲亭馬琴、『南総里見八犬伝』、八仙、和漢比較文学

### はじめに

今から十余年前、国立女子大学で「近世文学研究会」がほぼ毎月行われていた頃のことである。同研究会の懇親会が神田神保町の中華料理店で催され、その会場となった一室に、色彩鮮やかな「八仙過海」の額絵が飾られていた。それを目にした高木元氏が、内田保廣先生に「八仙って八犬士と関係あるのかな?」と問いかけられた場面を、今でも鮮明に記憶している。

『南総里見八犬伝』における八犬士の結末は、息子たちに家督を譲り、伏姫にもゆかりのある富山とやまに入って仙人になるというものがある。同書の最終回には、「八犬仙山中遊戯図」と題する挿画(図1)が掲げられており、ここでは里見家を退いた八犬士が、いずれも唐様の仙人姿で描かれている。高木氏が唐土の八仙から里見八犬士を連想されたのも、決して故なきことではない。宴席におけるこの問題提起は、長らく稿者の中に残り続けたが、その当否を検証するための糸口は、容易に見出すことが出来なかった。

後年、八仙を主人公とする神怪小説『八仙出処東遊記』の存在を知り、早速通読してみたところ、同作の大枠が『八犬伝』ときわめて類似していることに驚愕した。『東遊記』は『八



【図1】『南総里見八犬伝』第9輯巻53上、15丁裏・16丁表

犬伝』と同様に、それぞれ出自を異にする8人が苦難の末に会合し、強大な敵と激烈な戦争を繰り広げる物語なのである。「八仙伝」という異名を持つ『東遊記』は、馬琴が秘かに『八犬伝』の藍本とした白話小説なのではあるまいかという思いが、稿者の脳裏に兆した。

結論を先に示せば、本稿で述べるごとき諸事象から、先の推論は成り立ちえないと思われるのであるが、それでもなお、物語の結末で「八犬仙」となる里見八犬士の造形に、唐土の八仙が投影された可能性は残る。近時、八犬士と八仙との類似性に言及した論考も公刊されており、この問題は改めて検討してみる価値があるといえるであろう。

本稿では、白話小説『八仙出处東遊記』の筋立てを紹介し、馬琴が同作を披閲しえた可能性について検討を加える。その上で、『東遊記』の主人公である「鍾呂八仙」の概要を確認し、彼らの形象が『八犬伝』の中に投影され得るかという問題にも考察を及ぼしてみたい。

## 1 『東遊記』と『八犬伝』

『八仙出处東遊記』は、二卷五十六則<sup>1</sup>の中編小説で、その成立は万暦30年（1602）頃とされている<sup>2</sup>。国立公文書館内閣文庫には、同版の明刊本が二点現存し、そのうちの一本は紅葉山文庫<sup>3</sup>、もう一本は林羅山の旧蔵である。これらは、毎半葉の上部に挿絵の入る「上図下文」形式の版本であり、紅葉山文庫本の封面には「全像東遊記上洞八仙伝」「書林余文台梓」と標記されている（図2）。巻上の内題下には「蘭江呉元泰著／社友凌雲龍校」とあるが、両人の素性は明らかでない。巻下の末尾（52丁以下）には、八仙に関連する詩詞や序跋などが列挙されているものの、これらは物語との関連が薄く、版式も本文とは異なっている。

清代に入ると、本作は『西遊記』の節略本や『北遊記（北方真武祖師玄天上帝出身全伝）』『南遊記（五顯靈官大帝華光天王伝）』とともに、「四遊記」（四遊全伝とも）として一括刊行された。我が国では、明治17年に兎屋書店から出版された根村熊五郎の訳本<sup>4</sup>があり、また昭和62年には、「四遊記」の「翻訳連続版」（竹下ひろみ訳。エリート出版社）の一冊としても刊行されている。

『東遊記』の梗概は、以下の通りである（文中の太字が八仙）。

- A 太上老君（老子）のもとで得道した李玄は、徒弟の楊子に肉体を焼かれてしまう。その魂はやむなく餓死者の身体に宿り、**李鉄拐**として再生する。（第1～10回）
- B 漢の將軍**鍾離権**は、吐蕃との戦いに敗れて出家する。（第11～18回）
- C 赤脚大仙の降生である**藍采和**は鉄拐と道を談じ、のちに酒店から昇仙する。（第19回）
- D 白蝙蝠の化身である**張果**は、唐玄宗の御世に奇行を示す。（第20・21回）
- E 武則天の御世、何素女（**何仙姑**）が神人の夢告を受けて得道する。（第22回）
- F 東華帝君の転生である**呂洞賓**は、修行中に洛陽の妓女白牡丹のもとへ通い、鉄拐らに見咎められる。（第23～29回。以上巻上）
- G **韓湘子**は、おじ韓愈（文公）の左遷を予見する。（第30・31回）
- H 呂洞賓・鍾離権師弟が、それぞれ宋と遼の軍師となって争う。（第32～44回）
- I 曹太后の弟曹友（**曹国舅**）が得道して、八仙が揃う。（第45回）



【図2】『八仙出處東遊機』前表紙封面・本文巻頭

J 八仙は太上老君に面会して寿詞の揮毫を求め、次いで崑崙山の蟠桃会（西王母の誕生会）に参加する。（第46・47回）

K 蟠桃会からの帰途、八仙は東海龍王と争い、泰山を投下して東海を埋め立ててしまう。（第47～53回）

L 龍王は玉帝に援軍を乞い、八仙は齊天大聖を味方として、双方の争いは激化する。ここに至って、観世音菩薩らが両者を調停して和解させる。（第54～56回）

『中国小説史略』第16篇において、魯迅が「書中には文言・俗語を間へ出し、事はまた往々相属かず、蓋し民間の伝説を雑取してこれを作る」<sup>5</sup>と評しているように、『東遊記』の文体は白話よりも文言に近く、作中には先行文芸が、あまり手を加えない形で撰取されている。

物語の過半を占める八仙列伝（A～I）は、主として『列仙全伝』（万曆28年・1600初刊。和刻本あり）に基づくが、Hの師弟対戦は、『北宋志伝』（熊大木編、50回。『南北両宋志伝』の後半部）の楊家将故事から借り来たったものである。また、Jの蟠桃会参会には、宋代に起源する「八仙慶寿」故事が利用されており、K・Lの「八仙過海」は、雜劇「争玉板八仙過滄海」（明代中期ごろ成立。作者不明）の物語を撰取したものとされる<sup>6</sup>。

藍本となった先行文芸を勘案して、上の梗概をさらに要約すれば、

- ① 八人の列伝と集結 (A～I)
- ② 大戦前の貴人訪問 (J)
- ③ 大戦争と和解 (K・L)

の三段に整理することができる。『東遊記』の作者吳元泰は、書物や演劇など、さまざまな形で伝わる八仙関連の伝承を時間軸に沿って配置したが、各章段間の脈絡にはあまり意を用いなかったため、上の三区分別が作中に露呈しているのであろう。

一方、馬琴の『南総里見八犬伝』も、里見義実・伏姫父娘が中心となる発端部分（第1～14回）を除外すると、以下のごとき三段に大別しうる。

- I 八犬士の列伝と集結 (第15～131回)
- II 犬江親兵衛の京都滞在 (第131～150回)
- III 関東管領との大戦と和議 (第150～180回)

このように、いずれも構成員が八人の集団を主人公とする『八犬伝』と『東遊記』は、その物語の大枠も極めて類似している。八犬士列伝（I）の終盤に、蓼田素藤と里見家との小戦争（第97～123回）が挿入されている点や、IIIの対管領戦が、朝廷や幕府という絶対的な権力の介入によって休戦された点においても、『八犬伝』の展開は『東遊記』とよく照応するのである。

とはいえ、上のような構成の類似から、馬琴が『八犬伝』を構想する際に、『東遊記』を念頭においたと即断すべきではあるまい。両作の影響関係を論証するためには、馬琴が『東遊記』を披閲しえた可能性について、一考を加えてみる必要がある。

## 2 『東遊記』 舶載の記録

そもそも、天保期以前に『東遊記』が我が国へ渡来した痕跡は、決して数多く見出しうるものではない。

林羅山（1583～1657）の随筆『梅村載筆』地の巻には、彼の目睹した書籍の名前を列挙したらしき部分があり、その「雑」部には「八仙伝」が含まれている<sup>7</sup>。この「八仙伝」は、羅山の没後も林家に伝わり、浅草文庫を経て国立公文書館に現存する、明刊本『東遊記』のことであろう。一方、同じく内閣文庫に伝存する紅葉山文庫旧蔵本は、幕府の『御文庫目録』（東北大学図書館狩野文庫所蔵<sup>8</sup>）「波」部に、やはり「八仙伝」として登録されている。その掲出位置から推すと、同本は寛永16年（1639）以前に官庫へ納められたらしい。

このように、近世初頭には『東遊記』の明刊本が複数渡来していたのであるが、大塚秀高氏『増補中国通俗小説書目』（昭和62年、汲古書院）などに拠ると、我が国には内閣文庫本の他に、「四遊記」の一部ではない単刊の『東遊記』は伝わらないようである。

近世期の輸入書籍を記録した、宮内庁書陵部蔵『舶載書目』<sup>9</sup>のうち、「寛保元年（1741）改書控」西壺番船書目には、「東遊記 一部十本」が登録されている。ただし、「十本（冊）」という分量から推すと、これは『東遊記』のこととは思われない。同じ書目の後段には、件の「東遊記」の概要が記録されており、そこには「統証道書東遊記」「新編掃魅敦倫東遊記」「栄陽清溪道人著」などとあるので、該書は達摩大師の東行に取材した長編小説『東度記』（100回）の後刻本である。

また、西本願寺の『写字台文庫外典目録』<sup>10</sup>に登載された夥しい白話小説のうち、「東遊記 三帙四十巻」として所掲の一点も、やはり『八仙出処東遊記』ではなくして『東度記』である。西本願寺18世宗主文如上人（諱光暉。1744～1799）の収集とされる、写字台文庫の白話小説類は、大正期に大谷光瑞が一括して大連へ移送し、同14年（1925）には満鉄大連図書館へ譲渡された。『外典目録』に見える「東遊記」は、大連図書館の大谷文庫に現存する『東度記』の後刻本（40冊。雲林蔵板。康熙8年・1669序刊）と同定されている。

一方、唐話辞書『画引小説字彙』（秋水園主人編。寛政3年・1791、大坂泉本八兵衛等刊）

の巻頭に掲げられた「援引書目」には、「東遊記」と「東度記」とが揃って登録されており、この「東遊記」は『八仙出处東遊記』と見てよからう。ただし、『小説字彙』に収められた語彙や解説文は、その大半が先行する『怯里馬赤』(写本。岡間喬の編とされる)からの襲用であることが指摘されている<sup>11</sup>。よって、件の「援引書目」に列挙された、『東遊記』や『東度記』をはじめとする160点の小説類に、編者の秋水園が逐一目を通したとは考えづらく、『東遊記』の確かな消息を伝える資料の中に、『小説字彙』を数えるべきではあるまい。この白話辞書については、馬琴も松坂の小津桂窓に宛てた書翰(天保3年12月8日付)の中で、「引書信用しがたきものあり」と述べている。

既述のように、『東遊記』は「四遊記」の一部としても刊行されたが、上に言及した諸資料の中に、「四遊記」の名前を見出すことはできない。『増補中国通俗小説書目』によると、現存する「四遊記」諸本のうち、最も早い年記を持つものは、嘉慶16年(1811)の「明軒主人」序文を掲げる中国国家図書館蔵本(鄭振鐸旧蔵)などであり、「四遊記」としての一括刊行は、18世紀には遡りえないようである。

天保2・3年(1831・32)の大坂における唐本市の記録『新渡唐本市控帳』<sup>12</sup>にも、合刊本「四遊記」は登録されていない。しかしこの帳面の中には、題号に「八仙」を含む書籍を二点見出すことができる。

一 八仙録 十一匁かへ ふじ治 ニブ (天保2年5月12日条)

一 八仙伝 五十匁 藤治 仕度入帙四ブ (同年5月19日条)

ともに書肆藤屋治兵衛が買い入れた両書のうち、前者の「八仙録」は、何仙姑の得道を主題とする、梅庭氏編輯の説唱体小説『八仙縁』<sup>13</sup>であろう。この小説中にも、『東遊記』と同じ構成員の八仙が登場する。

一方、後者の「八仙伝」は『東遊記』である蓋然性が高いと思われるものの、それがいかなる伝本であったかは判然とししない。もっとも、我が国には『東遊記』単独の清刊本が伝存しないことを思えば、上の「八仙伝」は、刊行後間もない「四遊記」が、冒頭に収められた『八仙伝(東遊記)』の題号で記録されたものではあるまいか<sup>14</sup>。

その当否はさておき、以上述べ来たったごとく、『東遊記』は近世初頭に二点の明刊本が、揃って幕府枢要の所蔵に帰したものの、その後は長らく舶載の確かな痕跡を確認することができない。よって同書は、馬琴が『八仙伝』を起筆した文化年間においても、江戸の戯作者が容易に披閲できる作品ではなかったと考えられるのである。

### 3 馬琴の『東遊記』披閲の可能性

#### (1) 「唐山稗史書名」

そもそも、馬琴の読本や合巻、随筆の類を通覧しても、それらの中に『東遊記』の題号を見出すことはできない。もっとも、公刊された作品の中で、彼が『東遊記』に言及していたならば、同作と『八仙伝』との類似性は、すでにいずれかの先学によって指摘されていたは

ずである。

馬琴の作品群とともに確認すべきは、早稲田大学図書館などに数多く現存する彼の草稿類であるが、すでに索引が完備された日記や書翰の中にも、やはり『八仙出処東遊記』に関する記述は含まれていない。一方、彼の読書記録を多分に含み、最終的には40冊に及んだ雑録『著作堂雑記』は、目下のところ所在不明であり、長らく『曲亭遺稿』（明治44年、国書刊行会）に収められた関根只誠の「著作堂雑記抄」によって、その片鱗をうかがいするばかりであった。この「雑記抄」の中にも、『東遊記』の書名は確認できない。

すでに拙稿の中でも幾度か言及したように、昭和女子大学図書館には『著作堂雑記鈔録』と題する近代写本5冊が現存し、その中には只誠の「著作堂雑記抄」には未収の記事も数多抄出されている。この『雑記鈔録』の第4冊に収められた記事のうち、原本『著作堂雑記』の巻35（天保4年5月起筆）に由来する「唐山稗史小説」の一条も、これまで未紹介のものであった。ここには「列国演義」（『列国志伝』カ）以下、およそ百点の中国小説が列挙される一方、『遊仙窟』や『聊齋志異』などには「除去スベシ」と注記されているので、文字通り純然たる「稗史」（白話小説）の目録を志向したものと考えられる。

この「唐山稗史小説」は、『雑記鈔録』における前後の記事から推すと、天保4年（1833）秋から翌年夏までの間に、原本『雑記』へ書き入れられたものと思しい。そこで、この期間における馬琴の日記を眺めてみると、その中に以下のごとき記述を見出しうる。

- 一、昼時、木村亘より使札。（中略）尚又、同人頼和漢小説物、黙老見候目録二通、被差越、遺漏分書加くれ候様、申来ル。且、近来戯作者変態沿革之事、認くれ候様、いろいろ申来ル。右目録二通ハとめ置、返翰遣之。（天保4年10月19日）
- 一、予、旧冬黙老頼ミ、同人抄録「唐山稗史書名」遺漏六十余種、稿之。（天保5年正月14日）
- 一、予、黙老たのミ、同人抄録「唐山稗史類書名」六十余種抄録、夕方迄二抄し畢。（天保5年正月15日）

天保4年10月19日、高松藩江戸家老木村黙老が、「和漢小説物」の目録二通を馬琴に送付して、その補訂を依頼した。馬琴は同時に照会を受けた「近来戯作者変態沿革之事」について、同年12月から筆を執り、翌月初旬までに戯作者評伝『近世物之本江戸作者部類』の小字草稿本二冊を綴り終えている。黙老の「唐山稗史（類）書名」に補訂の筆が加えられたのは、それに続く正月14・15の両日であった。

『雑記鈔録』において、「唐山稗史小説」の直前には「冗籍国字稗史書名」「京撰書賈印行よみ本」の二項が抄録されており、これら三点の目録は、「和漢小説物、黙老見候目録二通」に馬琴が補筆した後の姿と考えられる。100余点を列挙する「唐山稗史小説」が、黙老の礎稿そのままであったならば、馬琴がそこへさらに「六十余種」の遺漏を追加することは、極めて困難であったに違いない。

この「唐山稗史小説」にも、『東遊記』の名前は見出しえず、馬琴はこの目録を補訂する時点まで、『東遊記』を繙く機会に恵まれなかったと考えられる。黙老からの私的な照会である以上、故意に秘匿する必要はあるまいし、また『八犬伝』との類似性に必ずや思い至る

であろう『東遊記』を、馬琴が忘失したと考えるのも不自然である。

よって、彼が『南総里見八犬伝』を起筆する以前に『東遊記』を繙き、この白話小説が『八犬伝』の構想に何らかの影響を与えた可能性は、極めて低いと判断せざるを得ない。『東遊記』を含む「四遊記」の刊行は、文化11年(1814)の『八犬伝』肇輯発兌に先行するが、南北の両『遊記』はもとより、『西遊記』の刪節本に対しても、馬琴は生涯を通じて何ら言及しておらず、この点も先の判断を補強するであろう。

## (2) 『西荘文庫目録』の「東遊記」

とはいえ、黙老の「唐山稗史小説」へ補筆を加えた後に、馬琴が『東遊記』を披閱し、その構成を執筆途上の『南総里見八犬伝』に取り入れた可能性は残されている。天保5年正月の時点で、『八犬伝』の執筆ははまだ半ばに及んではおらず、翌2月に起筆される第9輯上套(天保6年正月刊。第92~103回)の末尾において、長らく行方知れずであった犬江親兵衛が華々しい再登場を遂げる。刊行開始から20年を経て、八犬士列伝はようやく終盤へと向かう兆しを見せたのである。

従来、馬琴は起筆の当初から『八犬伝』全段の構想を思い描き、それを最後まで忠実に履行したと考えられる向きがあった。以下に引用する荒俣宏氏の言説は、その好例であろう。

(前略)そして、『八犬伝』が書きはじめの段階からして完結した物語になっていたという事実は、馬琴の稗史作者としての本質を見るうえで、実際忘れてはならない重要なポイントなのである。

というのは、馬琴にとってこの『八犬伝』は、書きはじめる前から全体の構想が完成していることが必須な作品だからなのだ。書きはじめた以上は、途中で細部の変更をけっして行なえない種類の作品だった。では、なぜそうなのか? 理由はひとつしかない。作品全体を完璧なシンボリズムの体系としなければならないからだ。すなわち、そこに用いられる挿絵も、冒頭の一行も、すべてが作品全体の意味と意図とを十分に念頭に置いたものになっていなければならない。かんたん明瞭に言えば、この作品には完璧な青写真が用意されていたのである。(「房総幻想王国」<sup>15</sup>)

しかし、夙に浜田啓介氏が明解に説かれているごとく、『八犬伝』には当初からの「完璧な青写真」など存在しなかった。

ただ結論として天保6年までは八犬具足で団円の構想であった事が分るし(中略)、天保7年9月の「下峽ノ上附言」に親兵衛の上京と、多分はその留守中に結末をつけるべき小戦との構想がうかがわれる。対管領戦への構想は天保9年著述の13篇(稿者注、第9輯下峽之下甲号。第136~145回)以後である。犬士に功を立てさせる事は最初から考えられていたかも知れない。しかしもっと小規模な事件が予想されていたであろう。

(「八犬伝の構想に於ける対管領戦の意義」<sup>16</sup>)

つまり、「貴人訪問」(Ⅱ)から「大戦争」(Ⅲ)に至る、『八犬伝』後半部分の展開は、天

保5年の時点においても、決して唯一絶対の既定路線ではなかったのである。もっとも、八仙の蟠桃会参会から龍王との大戦争に至る『東遊記』後段の結構が、八犬士集結以降の『八犬伝』に踏襲されたとするならば、馬琴による同作の披閲は、天保8年以前でなければなるまい。何となれば、八犬士会同から犬江親兵衛の入京に至る第9輯下帙之中（第126～135回）は、天保8年2月から9月にかけて執筆され、同年11月に売り出されたものだからである。

ただし、物語が犬江親兵衛の京都滞在に及んだのち、馬琴がいずれかの時点で『東遊記』を繙読し、自作との偶合を喜んで、『八犬伝』の後続部分に『東遊記』の大戦争をはめ込んだ場合も想定しうる。よって以下の考察においても、特に「天保8年以前」とは限定せず、馬琴が天保期に『東遊記』を披閲した可能性を検討してみたい。

伊勢松坂の豪商で、馬琴の「三知友」の一人でもあった小津桂窓（1804～1858）の『西荘文庫目録』（5点10冊）が、近年関西大学図書館の所蔵に帰し、その中でも特に重要な「蔵書目録」（内題）が、中尾和昇氏によって翻刻紹介された<sup>17</sup>。この目録は「茶」「書画伝記」以下11の部立てに分類されており、特に中盤以降には小説や俳諧・絵画など文芸的な書籍が並ぶ。天理図書館所蔵の『西荘文庫目録』（月の部）は、漢籍や邦人の詩文を主体とするが、白話小説（「唐本稗史」とその翻訳（「翻刻通俗稗史」）は、新紹介の関大本に登載されている。

この関大本「蔵書目録」の「唐本稗史」中に、「東遊記 四」が見えることを知って、稿者は再度一驚した。分量が「四」冊とあるからには、『東遊記』（20巻100回）の異名ではあるまいし、ましてや彼の地にも残本しか伝わらない『狐仙口授人見楽妓館珍藏東遊記』（10冊24章のうち、8章のみ現存<sup>18</sup>）のこととも思われぬ。知友の蔵書中に『東遊記』が含まれていたならば、馬琴が同作を披閲した可能性は、飛躍的に高まるではないか。

「唐本稗史」の中に列挙された37点のうち、以下の諸書については、馬琴の書翰などを通して、桂窓が入手した時期を確認することができる。

|              |       |   |               |
|--------------|-------|---|---------------|
| 4 水滸後伝 著作堂校本 | 十     | → | 天保7年（天理図書館現蔵） |
| 7 平妖伝        | 四     | → | 天保3年（同 上）     |
| 8 平妖伝 写本     | 廿     | → | 天保6年          |
| 15 紅楼夢       | 廿四 四帙 | → | 天保3年          |
| 18 八洞天       | 四     | → | 天保4年          |

（先頭の数字は、「唐本稗史」における掲出位置）

ここからも読み取れるように、桂窓「蔵書目録」は書籍を取得順に配列してはならず、よって同日録における『東遊記』の掲出位置（第9番目）から、桂窓が該書を手に入れた時期を特定することはできない。

一方、この関大本「蔵書目録」には、天保15年成立の「著作堂旧作略自評摘要」<sup>19</sup>が登録されるばかりでなく、『八犬伝』は106冊、『美少年録』も45冊と、それぞれ全備した冊数が記載されている。特に『近世説美少年録』（第31回以降は『新局玉石童子訓』と改題）の最終編は、馬琴の没する弘化5年（1848。2月に嘉永改元）の刊行であり、この点から桂窓「蔵書目録」の最終的な成立は、馬琴の没後であった可能性が残る。よって、『東遊記』が桂窓の蔵書に加えられた時期についても、馬琴の生存中に限定することは難しい。同日録には『鴛



『鴛配』や『幻中真』（ともに4冊12回）、『小説選言』（小本6冊。短編集）のごとく、『東遊記』と同様に馬琴の言及を見出しえず、『著作堂雑記』の「唐山稗史書名」にも未登録の白話小説が複数含まれている点にも留意すべきであろう。

同じ松坂の富商・殿村篠斎の仲介を得て、桂窓が馬琴との初対面を果たしたのは、文政11年（1828）12月4日のことであった。しかし、翌年2月10日に帰郷の挨拶を兼ねて、桂窓が再度著作堂を訪れたのちは、両人の交流した形跡を長期間見出しえなくなる。文政13年（12月に天保改元）は馬琴の日記が現存せず、同年における篠斎宛馬琴書翰の中にも、馬琴と桂窓との往来をうかがわせる記述は含まれていない。また、翌天保2年の馬琴日記にも、桂窓の名前は一たびも現れないのである。天保3年2月4日における桂窓の自家訪問を、馬琴は「久々にて対面」と称しており（同年2月19日付篠斎宛書翰）、3年近い歳月を、両人は極めて疎遠に過ごしたらしい。よって、桂窓の『東遊記』入手が、たとえ天保初年まで遡りえたとしても、同書が天保3年以前に馬琴へ貸与された可能性は、極めて低いといえる。

天保3年11月25日付の篠斎に宛てた書翰の中で、馬琴は「扱は桂窓子も、小説被読候心出候に付、彼是小説かひ入られ候品も有之」と記しており、白話小説に対する桂窓の関心は、馬琴や篠斎からの感化を受けて、この頃ようやく高まってきた模様である。翌月8日付の桂窓宛書状の中で、馬琴は同人が所持する邦人の白話研究書について、各々の有用性を懇切に教示している。

以後天保5年の歳末に至るまでの期間は、馬琴の日記が現存し、彼の書翰も数多確認されているが、それらの中にも『東遊記』に関する記述は見出しえない。馬琴は兼ねてから篠斎に対して、「何によらず御所蔵の小説もの、追々御恩借奉希候」（天保3年2月19日付同人宛書翰）と依頼しており、桂窓も篠斎に倣って、新収の稗史を逐一馬琴へ報じていたと思われる。実際、桂窓は先に掲げた『八洞天』（筆鍊閣編述。8巻8話<sup>20</sup>）や小本『紅樓夢』の入手を、即座に馬琴へ申し送っており、また、天保4年に桂窓が京都の小石元瑞から、李漁の『連城壁』を借覧した一件も、篠斎を通じていち早く馬琴の耳に入っている。よって、文政11年から天保5年までの期間に、桂窓が『東遊記』なる白話小説を所持していたか、あるいは新たに買い入れたならば、馬琴がその情報を聞き及ばない状況は、極めて想定しづらいのである。

### （3）天保中期における書籍の借覧

馬琴の日記が失われた天保6年以降は、桂窓を含む知友との交流を跡づけることが極めて困難になる。その一方で、馬琴の身の上には家庭的な不幸と視力の低下とが重なり、これが篠斎の和歌山退隠や桂窓の多忙とも相俟って、江戸・松坂間における書物の往還は、次第に減少していった模様である。馬琴は天保11年6月以降、知友に宛てた書翰の執筆さえ家人に委ねており、彼が『東遊記』に限らず、書物一般を披閲することのできた期間は、天保11年前半を最下限と考えてよいだろう。

柴田光彦氏・拙共編『馬琴書翰集成』（平成14～16年、八木書店）の中には、天保6年初頭から同11年6月までの桂窓宛馬琴書翰が、長短合わせて69通収められている。ほぼすべての馬琴書翰には、直近に受け取った相手方からの書状と、その書翰に先行する自身の書状との日付が明記されており、それらの日付を現存書翰と照合することによって、馬琴書翰の欠損状況をおおよそ把握することができる。このような作業の結果、前述の期間において、散佚

したことが確実な桂窓宛馬琴書翰は、以下の5通に過ぎないことが判明する。

|             |                  |
|-------------|------------------|
| 天保8年正月6日付別啓 | (同月26日付書翰に見える)   |
| 同 年4月24日付   | (同年8月11日付書翰に見える) |
| 同 年5月21日付   | (同年6月16日付書翰に見える) |
| 天保9年正月6日付   | (飛脚屋にて紛失)        |
| 同 年11月朔日付   | (翌年正月3日付書翰に見える)  |

この他、桂窓宛の荷物に添付された書状が、若干数欠損している模様であるが、それらはいずれも短翰であったと思われる。よって、件の期間内における桂窓宛馬琴書翰は、9割以上が現存すると判断して大過あるまい。

馬琴と知友との間において、書物の貸借は金銭と同様に、少しもゆるがせにできないものであった。ゆえに馬琴が知友から書物を借覧した場合、相手方への書翰には、その落掌と返却発送の日付のみならず、披閲の経過や短評、あるいは返送後の安着通知に対する謝辞なども書き付けられるので、一つの書物が複数回にわたって馬琴の書状中に出現することとなる。よって、仮に連続する2通の桂窓宛書翰が散佚した天保8年の夏に、桂窓が馬琴へ『東遊記』を貸与したとしても、同書に対する馬琴の言及が、件の2通に尽されていたとは考えづらく、よって先の仮定は容易に成り立ちがたい。

天保6年2月21日付の書翰において、馬琴は桂窓へ以下のように申し送っている。

悴ハ病身にて読書も成かね、只われら一人、老後のたのしみニ候へバ、今しバしの間の事ニ可有之候。老拙身後ニハ、速ニ沽却いたし候様、悴江申聞置候。老後のたのしみハ、看書の外無之候へども、書淫故、奇書杯見候へバ、うつさせ度成候。イツツ見ぬがましならんと存定、今年より写本ハフツトやめ候つもりニ御座候。依之、恩借の御蔵本も、急ギ不申候。もし、先江より御幸便御座候ハ、格別之事、当分御かし被下候事、御見合せ可被下候。

ここに「病身」とある馬琴の息子宗伯は、同じ年の5月8日に不帰の客となるのであるが、馬琴はそれに先だって、桂窓に書物の貸与を謝絶したのである。とはいえ、「御幸便御座候ハ、格別之事」ともあるように、桂窓はこれ以降も馬琴に書物を貸し与えており、白話小説に限定しても、『平妖伝』の40回本と小本『紅樓夢』との貸借を確認することができる。

このうち、天保6年(1835)に購得された40回本『平妖伝』(写本)の場合、桂窓は同作が馬琴久恋の書であることを承知しており、入手の直後にみずから進んで江戸へ送付したのである。馬琴は同書をこの年12月27日に落掌し、自家蔵本に不足する後半部分の写本を作成した上で、翌天保7年6月21日に松坂へ向けて返送している。

一方、小本『紅樓夢』については「中本」、すなわち通常よりも小型の読本を執筆するための下準備として、馬琴の側から桂窓へ借覧を願い入れたのである。馬琴は天保7年6月19日に同書を落掌したが、視力の低下と多忙とに災いされて、結局は読了せぬまま返却したらしい<sup>21</sup>。つまり『平妖伝』と『紅樓夢』の借覧は、前掲書翰の中に表明された、「イツツ見ぬ

がましならん」という馬琴の悲壮な決意を度外視した、「要緊」の事態と称してよいだろう。

馬琴は同時期に、篠斎からも白話小説『警世通言』と『快心編』とを借り入れているが、これらも和歌山退隠中の篠斎が、馬琴の要請を受けて、松坂本宅から発送させたものであった。これらの諸事象を勘案しても、桂窓が事前の照会なしに『東遊記』を馬琴へ送りつけ、それに伴う応酬が、未発見の馬琴書翰のみに尽されているといった事態は、にわかに想定しがたいのである。

それでも辛うじて可能性が残るのは、江戸滞在中の桂窓が馬琴のもとへ『東遊記』を持参し、馬琴がこれを忽卒に読了して、時日を経ずに桂窓へ返却した場合であろう。これならば、馬琴書翰の中に貸借の経緯が現れなくとも、あながち不自然ではない。件の期間中、桂窓は天保7年(9・10月)と同11年(2~4月)の二度、江戸に滞在したことが確認できる。しかし既述のごとく、天保11年春の時点で馬琴はほぼ明を失っており、たとえわずか4冊の中編であろうとも、短期間で読了するのは困難な状況であった。また天保7年の場合も、11月に四谷への転宅を控えて「紛冗」の最中にあった馬琴は、要緊の書ならざる白話小説を繙読するための余裕を持ちあわせなかったはずである。天保7年10月4日から17日までの日付を持つ桂窓宛馬琴書翰は9通現存するが、当然その中にも『東遊記』に関する記述を見出すことはできない。

天保11年に桂窓の訪問を受けた頃、馬琴は40回本『平妖伝』の自家蔵本(2帙12冊。国会図書館現蔵)を、殿村篠斎へ売却する準備を進めていた。4月11日に発送された紙包は、5月6日に松坂へ到着し、この時すでに同地の本宅へ戻っていた篠斎は、読了後に『平妖伝』と『西遊記』『封神演義』との優劣論を、馬琴へ申し送っている。これに対して、馬琴は同年8月21日付の篠斎へ宛てた書翰の中で、『西遊記』を「無類」として最上位に置き、史実という「より所」のある『封神演義』は、『平妖伝』よりも作者の働きの少ないと寸評した。上記3作品と同じく「神怪小説」に分類される『東遊記』については、ここにも何ら触れるところがない。

もっとも、篠斎の所感に応じた短評である以上、馬琴もあえて他の作品には説き及ばなかったのかも知れないが、少なくとも当時の彼にとって、『東遊記』はこのような場合に逸することのできない重要な作品ではなかったのである。あるいは馬琴のみならず、桂窓と同じ松坂に住む篠斎も、『東遊記』については何ら知るところがなかったのではあるまいか。

本節に述べ来たった諸事象を総合すると、馬琴が天保期に『東遊記』を披閲し、その構成を『八犬伝』の中に襲用した可能性は絶無でこそないものの、極めて低いと判断せざるをえない。とはいえ、この問題に最終的な結論を出すためには、今後さらなる関連資料の発見・紹介を俟つべきであろう。

#### 4 『東遊記』と『水滸伝』

馬琴が終生『東遊記』を披閲する機会に恵まれなかったとするならば、同作と『八犬伝』との構成は、何故にかくも類似しているのであろうか。このような疑問に対して、稿者も明確な答えを用意しているわけではないが、おそらくは呉元泰と曲亭馬琴が、ともに『水滸伝』を意識していたからではないかと考えている。一定数の構成員が次第に集結し、貴人との対

面を経て、強敵との戦争に臨むという一連の展開は、『水滸伝』とも共通するものである。

『八犬伝』の構成を自解する際に、馬琴はしばしば『水滸伝』に言及しており、とりわけ以下の一節は、両作の関係を論じる上で逸することのできないものであろう。

八犬士、俱ともに安房に到りて、里見の家臣になるのみにて、犬江親兵衛を除くの外ほか、七犬士皆一介いさをの功なくは、是戸位素浪これしゐそざんの人になるべし。犬士等かくの如くにして、可ならん乎。且京師かの話説かつみやこ微りせば、俗に云田舎芝居ものがたりなかに似て、始より説く所はじめ、東八州ひがしはつしゅうの事に過ぎず。然では話説ものがたり広からで、大部たいぶの物ものの本ほんに、足たらざる所あり。譬たとへば『水滸伝』の如きも、七十回ななじゅうの後、招安せうあんの事、及京師またみやこの話説ものがたりあり。こゝに至ていたり、一百八箇も、まりの魔君やつ、皆よく変して、宋の忠義士しゅうぎしになれり。倘是等もしこれらの事なくて、七十回にて局を結ばず、彼かの一百八人いつひやくはちにんは、梁山泊しょうしふ嘯聚ぬすびとの強人のみ、何をもてよく勸懲かんちやうにせんや。

(第9輯巻之29簡端或説贅弁。天保8年2月稿)

ここで馬琴は犬江親兵衛の上京について、八犬士を「戸位素浪の人」とせぬための、必要欠くべからざる筋立てとし、その例証として、『水滸伝』にも「招安のこと」や「京師の話説」があることを挙げている。『水滸伝』における「京師の話説」とは、第71回で宋江らがひとたび入京し、その後高俅率いる官軍と梁山泊軍との戦争を経て、第81回で燕青が再度東京に潜入し、徽宗と対面して赦免状を賜るという一連の展開を指す。

一方、犬江親兵衛が上京した主たる目的は、八犬士の「金碗」改姓に対して、朝廷や幕府から承認を取り付けることであつた。里見家の忠臣金碗たかよし孝吉は、妖婦玉梓の怨霊ゆえに切腹し(第7回)、その息子孝徳も、出家して、大となつた(第14回)。このため、里見義実よしざねは八犬士に「金碗」姓を与えて、孝吉の忠義に報いようとしたのである。金碗は旧国守神余氏じんよの一族であり、八犬士が揃つて金碗姓に改めることは、『水滸伝』における「招安のこと」と同様に、作中の勸善懲悪を貫徹するためにも欠くべからざる筋立てであつた。

これに対して、『東遊記』における八仙の蟠桃会参会は、「男子登仙すれば先づ木公を拝し、女子登仙すれば先づ金母(西王母)を拝す」(第46回)という慣例に従つたものであるが、何仙姑を除く7人の男仙が西王母を拝する必然性は乏しい。既述のように、『東遊記』の作者呉元泰は、作品の構成にあまり意を用いておらず、八仙が揃つて西王母を訪問する理由付けも、先の一文でこと足れりと判断したのであろう。

また、犬江親兵衛の上京中に勃発した「対管領戦」、すなわち関東管領上杉家と里見家との戦闘について、その必要性を自解する際にも、馬琴は『水滸伝』を引き合いに出している。

本伝第九輯に至りては、二三十回、皆軍旅攻伐の事ならざるはなし。(中略)遮莫『水滸』は、征伐二度に至りて、百八人の義士多く陣歿して、最後に宋江・李逵等、毒を仰ぎて死に至れり。看官みるひと遺憾このりをしく思ふめれど、こは勸懲に係る所、果敢なく局を結べるは、則作者の用心也。然れば本伝は、用意彼と同じからず、この力戦の故をもて、里見十世の榮さかえを開く、花あり実あり、約束あり。且性情仁義の致す所、實これに是大団円の、歡びを尽すに足るべし。看官本伝の、『水滸』に摸擬せし所これあるを知れども、作者の用心はじめ始より、『水滸』に因よらざるを知らぬも多からむ。(第9輯巻之36問端附言。天保11年4月稿)

馬琴は当時、『水滸伝』における賊寇討伐と、それに伴う梁山泊軍の壊滅とを、宋江らが招安以前に犯した悪行を精算するものと捉えていた。「水滸三等観」と称されるかくのごとき見解は、文政11年に至って確立されたものである。もっとも、馬琴の造形した八犬士には、精算すべき悪行がないので、『八犬伝』における「対管領戦」の存在意義も、おのずから『水滸伝』の賊寇討伐とは相違する。

『水滸伝』の中で、『八犬伝』終盤の大戦争と対比すべきは、招安以降の遠征ではなくして、むしろ「京師の話説」に挟まれた「対官軍戦」(第76～80回)であろう。この戦争は対管領戦と同様に、従来取り結ばれた大小の仇敵関係をひとまず精算する機能があり、好漢たちに大敗を喫して捕縛された『水滸伝』の太尉高俅は、『八犬伝』における管領扇谷定正あふきがやつだまさや許我公方こが足利成氏なりうちらとよく照応する。また、停戦後に勝者の側(里見家/梁山泊)の正当性が、より高次の権力(朝廷・幕府/皇帝)によって承認される点においても、二つの戦争は軌を一にしている。

これに対して、『東遊記』における龍王と八仙との大戦争は、東海龍王の太子摩揭が藍采和の玉板を奪ったことから唐突に勃発し、最終的には観世音や阿弥陀仏・老子らの仲介により休戦された。この一段も、八仙列伝や蟠桃会参会との関連性が薄く、龍王の側だけが甚大な被害を蒙るという大戦争の決着には、作者の「用心」を見て取るべくもない。

よって、『八犬伝』における事件の配置は、『水滸伝』よりも『東遊記』に近似しているものの、そこに込められた馬琴の作意は、彼が「理義にあはぬ所なし」(文政13年3月26日付篠斎宛書翰別紙)と評した『水滸伝』を強く意識したものと考えられる。とはいえ、「列伝・貴人訪問・大戦」という3段階は、先に引用した浜田氏の論考にも説かれていたように、『八犬伝』起筆当初からの腹稿に含まれていたわけではなく、外的な諸要因にも影響されて、結果的にたどり着いた構成形態であった。上に掲げた2つの文章も、馬琴の「完璧な青写真」を語るものではなく、執筆時点における構想を、自身の『水滸伝』観に沿う形で説明したものと理解すべきであろう。

里見家に集う犬士が8人であることに関して、馬琴は以下のように述べている。

『水滸』『西遊記伝』の如き、是大筆の手段といへども、『水滸』はも、まりやたり一百八箇の豪傑、その人きは極めて多ければ、(中略)全伝かいしゆ開手の豪傑なるに、梁山泊に入りしより、その勢すなはちひ始に似ず、俱に軍陣に莅むの外は、ありといへどもなきが如し。(中略) 廻『水滸』百八人の、百を除きて八犬士あり。(中略) か、ればその人多からず、又その人寡すくなからず。『水滸』の多きと、『西遊』の、寡すくなきには似るべくもあらず。

(第9輯中帙附言。天保6年8月稿)

もとより、里見八犬士には『書言字考節用集』という出拠があり、犬士の員数も、決して馬琴の意中から生み出されたものではなかったが、それでも彼はこの「8」という数字を、『水滸伝』の「108人」に関連づけずにはいられなかったのである。あるいは、『東遊記』の作者呉元泰も、馬琴のように「『水滸』百八人の、百を除きて八」という着想から、8人の神仙が参集して、驚天動地の大戦争を繰り広げる物語の想を構えたのかも知れない。『東遊記』が

成立したと目される万暦年間には、すでに複数の『水滸伝』刊本が出版されており、呉元泰が同書の構成を念頭に置いて、既存の八仙故事を配列した可能性も、軽々には否定できぬことであろう。

このように、『東遊記』と『八犬伝』との関係は、前者が後者に影響したという直接的なものではなく、ともに『水滸伝』の影響下にある英雄拮拾型の物語と見なすのが妥当と思われるのである。

## 5 八仙の構成員と「八仙図」<sup>23</sup>

それぞれに出自の異なる8人の神仙が会同した「鍾呂八仙」は、『東遊記』の物語を離れても、伏姫の神霊に導かれて里見家に参集した「異姓の兄弟」である八犬士との間に、いくつかの共通点を有している。この点について、信多純一氏は大著『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』（平成16年、岩波書店）の中で、以下のように指摘しておられる。

八仙、蜀の八仙その他取り合せは多いが、一般に画題としても元代に始まる次の八仙が著名である。

漢鍾離 張果老 韓湘子 李鉄拐 曹国舅 呂洞賓 藍采和 何仙姑（中略）

しかし、ここで注意すべきは、画題として定着している八仙図中に二人の女仙が居ることである。八犬士初めの女装二大士犬塚信乃・犬阪毛野の存在が関連を持つことは十分記憶されてよい。『名数画譜』（中略）、『絵本手鑑』等でもその藍采和・何仙姑が描かれている。

要するに、馬琴は首尾を呼応させて、神仙世界を確かに本作の深層に潜ませていることを確認しておきたい。（信多氏著書、89頁）

信多氏のこの指摘に対して、高田衛氏も『完本八犬伝の世界』（平成17年、ちくま学芸文庫）において、以下のように賛意を表された。

信多の考察は、『八犬伝』「初輯」口絵をめぐる、神仙趣味の考証から始まっており、この八仙のなかの「六男二女」構成の指摘は重要な意義を持っている。信多はまた『八犬伝』終局における八犬士の昇仙の図、「八犬仙山中遊戯之図」をも、ここに引いており、『八犬伝』終局の八犬士昇仙と、この「八仙図」を対照させている。

ということは、（中略）「八仙図」において、すでに八犬士の「六男二女」構想の抛り所が説明できるということである。（高田氏著書、166～7頁）

両氏は現行の八仙が「六男二女」の編成であることを重視しておられるが、「鍾呂八仙」の構成員には複数の異説があり、現行の8人に固定したのは、『東遊記』の影響が大きいとされている。この点について、李剣平主編『中国神話人物辞典』（1998年、陝西人民出版社）の「八仙」項は、以下のように説明する。

古代神話の伝説上の8人の神仙である。ただし、八仙とはつまり誰を指すのか、それには4つの説がある。

- (1) 呉元泰の説は、張果老、漢鍾離、曹国舅、鉄拐李、呂洞賓、韓湘子、藍采和、何仙姑を八仙とする。『八仙出処東遊記』に見えるものである。
- (2) 朱有燉の説では、何仙姑を除いて徐神翁に代える。「八仙慶寿」雑劇に見えている。
- (3) 兪樾の説では、風僧寿・元壺子を張果老・何仙姑に代えている。『茶香室叢抄』の巻14に見える。(中略)

この中では、呉元泰の説がもっとも流布している。 (拙訳)

(4) として提示された「蜀八仙」は、その構成員が「鍾呂八仙」と1人も重ならず、来源の異なる別個の集団と思われるので割愛した。

(3) に紹介された『茶香室叢抄』の記事は、同書の巻14に収められた「四仙図」と題する一条で、ここで兪樾は白話小説『三宝太監西洋記』(100回。万暦25年・1597刊)に見える八仙が、張果と何仙姑を欠くことに疑義を呈している。『茶香室叢抄』の同じ巻には「何仙姑」の一条もあり、兪樾もまた今日通行の「鍾呂八仙」を、標準的なものと認識していたらしい。

もっとも、風僧寿と元壺子を含む八仙は、『古今類書纂要』(和刻本あり)巻12の「八字通義」や、王圻『続文献通考』巻241「道書名義」にも紹介されており、有力な異説と見なしうる。また元代雑劇においては、(2) に見える「八仙慶寿」と同じく、何仙姑が徐神翁に置き換わるのみならず、曹国舅に代えて張四郎が入るものも多いという(注6の二階堂氏論考参照)。

信多氏は我が国近世期における八仙図像として、大原東野『名数画譜』(文化7年・1810刊)第2冊・地の巻に収められたものと、大岡春卜『絵本手鑑』(享保5年・1720刊)巻5所収のものとを例示している。しかるに、信多氏は言及しておられないのであるが、『名数画譜』の第4冊・附録には、収録された図像に対する略注があり、「八仙人図」については、以下のよう

八仙人図 唐人也。鉄拐 風僧哥 鍾離先生 呂洞賓  
藍采和 懸壺 曹国舅 韓令 群書拾唾 (5丁裏)

明代の名数書『群書拾唾』(張九韶編。12巻。和刻本あり)の巻11から引用されたこの八仙は、先に言及した『茶香室叢抄』や『続文献通考』などとほぼ同一であり、特に何仙姑を欠いている点には留意せねばなるまい。

もっとも、図3の左前方に振り返った姿で描かれる仙人は、蓮の葉を肩に掛けている点からも、上の解説文には見えない何仙姑であろう。また、一番右側で花籠を携えた人物は、紛れもなく藍采和である。八仙はそれぞれ象徴物である「暗八仙」を所持しており、「蓮(荷)」は何仙姑、「花籠(籃)」は藍采和を暗示している。つまり、『名数画譜』



【図3】『名数画譜』71丁表



【図4】『繪本手鑑』巻5、6丁裏・7丁表

に掲げられた八仙図は、今日通行の構成員を描いているらしく思われるものの、同書の編者大原東野は、図中の神仙について十分な知識を持ちあわせなかったことになる。

一方、やはり信多氏の紹介された『繪本手鑑』の八仙図（図4）において、右端に描かれた2人の人物は、たしかに女仙のようであるが、編者の大岡春卜は、各々の名前を書き添えていない。この図の左から2番目に描かれた、比較的身なりの整った男仙は、左肩に蓮の葉を担っているが、既述のように蓮は今日何仙姑の象徴物とされている。また、二女仙の左側には横笛を手にした人物が描かれており、これは今日の理解からすると韓湘子に当たるが、八仙の中で最も若年の韓湘子としては、同図の中央奥に描かれた少年の方が、より相応しいように思われる。この少年と向き合っている瓢箪を肩にした老人は李鉄拐であろうが、少年の手前に描かれた人物は剣と扇とを所持しており、これでは鍾離権なのか呂洞賓なのか判断が付けられない。このように、『繪本手鑑』の八仙図は、構成員が今日通行のものとは異なるか、あるいは不十分な知識に基づいて描かれたものと考えられるのである<sup>22</sup>。

また、信多氏は藍采和を「女仙」と断定しておられるが、図3を見る限りでは少年のようでもあり、『名数画譜』の八仙図が本当に「六男二女」を描いたものか疑念が残る。『列仙全伝』巻4の挿絵に描かれた采和（図5）は、破れた衣に片脚は鞋、片脚は裸足という異装で、緡銭を引きずり拍板を鳴らしながら歌い歩いており、その容姿は少年のものであろう。また、元雑劇『漢鍾離度脱藍采和』において、藍采和は妻子ある役者にして戯班「梁園棚」の班主（座頭）許堅の芸名であり、彼は鍾離権の導きで、家族への恩愛を断ち切って昇仙する。『東遊記』における藍采和も、第47則で西王母から「賢弟」と称されており、やはり紛れもない男仙であった。

『列仙全伝』の作者にも擬される王世貞は、「題八仙像後」



【図5】和刻本『列仙全伝』巻4、7丁裏





【図6】『文鳳画譜』第3編、27丁裏・28丁表

（『弇州統稿』巻171。欽定四庫全書所収）と題する一文の中で、鍾呂八仙の構成員について、「是を以て八公は、老は則ち張、少は則ち藍・韓、将は則ち鍾離、書生は則ち呂、貴は則ち曹、病は則ち李、婦女は則ち何なり」（下線稿者）と述べている。ここで藍采和は、韓湘子とともに「少（若者）」とされており、やはり「婦女」には区分されていない。

一方、趙翼は『陔余叢考』巻34「八仙」項の中で、「是れ藍采和は乃ち男子なり。今戯本に又た硬差して女粧に作る、尤も笑ふべし」と、雑劇における誤伝を嘲笑している。彼の地の演劇や電視劇においては、今日でも藍采和を多く女優が演じており、この神仙を女性と見なすのは、庶民文芸に起源する俗説なのであろう。

よって、六男二女構成の「鍾呂八仙」が、化政天保期の我が国においても一般的であったことを説明するためには、信多氏の提示した2図は決して適当なものとは思われない。その一方で、たとえば図6の河村文鳳『文鳳画譜』第3編（文化10年・1813刊）に見える八仙図は、「鉄拐先生、侯先生、鍾離權、呂洞賓、武志士、張果老、麻姑、謝中初」と、その半数が現行の八仙と相違しており、ここには何仙姑と藍采和が含まれないのである。もとより、馬琴が『文鳳画譜』を目にした確証は得られないが、それは『名数画譜』や『絵本手鑑』と同様であり、何よりも『八犬伝』刊行開始の前年に、今日の理解とは大きく異なる八仙図が公刊されていた事実は、決して等閑視すべきものではあるまい。

## 6 「八仙」に関する馬琴の言及

そもそも、馬琴の読本における「八仙」への言及は、決して数多く見出しうるものではなく、稿者が気付いたものは、以下のわずか3例に過ぎない。

か<sup>の</sup>いんちう<sup>は</sup>つせん<sup>か</sup> 彼飲中の八仙歌にも、李白<sup>もろはく</sup>は諸白<sup>からな</sup>の唐名にあらず。

（文化7年・1810刊『夢想兵衛胡蝶物語』前編巻4、1丁裏）

晋には七賢八達あり、唐には六逸八仙あり。（酒に関する故事のうち。同上、19丁裏）  
酒は酔中の八仙も、知ざるを旨とせらる。

（天保10年・1839刊『八犬伝』第9輯巻24、25丁表）

もつとも、これらは杜甫の「飲中八仙歌」に謳われた八人の酒豪に関するものであり、いずれも「鍾呂八仙」とは無縁である。しかるに、信多氏は前掲書の中で、上に掲げた『八犬伝』第9輯の記述を紹介し、これを『書言字考節用集』（槇島昭武編。享保2年・1717刊）に基づくものと断じておられる（前掲書の注34）。その上で、氏は同じ節用集の中から見出された里見八犬士の中に、八仙が「響き合っていよう」とされるのであるが（同書142頁）、ここには論理の飛躍がないだろうか。「飲中八仙」と「八仙」とは、おのずから別個の集団であり、また『書言字考』に立項された「唐八仙」は、前節で紹介した『名数画譜』の附録や『群書拾唾』と同じもの、すなわち何仙姑を欠いた「六男二女」ならざる8人なのである。

『書言字考』と同じ構成員の「八仙」が登場する神怪小説『三宝太監西洋記』を、馬琴は文政末年に披閲している。ただし、彼が殿村篠斎から『西洋記』を借覧したと思われる文政13年（天保元年）の馬琴日記は現存しないため、その披閲経過を跡づけることは困難である。後年、彼は所蔵者篠斎に宛てた書翰の中で、この作品を「一向ニおもしろからぬもの」と酷評しており（天保5年正月6日付）、風僧哥や玄壺子を含む八仙が、驪山老母に敗退する一段（第44回）を、馬琴は等閑に読み飛ばしたかも知れない。

その一方で、彼の机辺に存した書物の中にも、今日通行の「八仙」を紹介したものは含まれている。たとえば、馬琴が文化5年ごろに購入し、読本『椿説弓張月』（文化4～8年、平林堂等刊）や随筆『燕石雑誌』（文化7年、文金堂等刊）などにおいて考据とした『潜確居類書』（陳仁錫撰。120巻）のうち、巻63・方外部の「八仙」項は、かつて『東遊記』の趣向源と目されたこともある<sup>24</sup>。また、巻12には八仙の異説を掲出する『古今類書纂要』も、巻8・鬼神部においては何仙姑を含み、張果老を徐神翁に代えた形の八仙を紹介している。ただし、いずれの類書にも藍采和の性別は明記されておらず、これらの記事も、馬琴が八仙を「六男二女」と把握していた証左にはなり得ない。

「鍾呂八仙」という集団に対して、馬琴の明確な言及が見当たらない一方で、構成員の1人である鍾離権は、馬琴読本の中に3度登場している。

譬ば、鍾離権を、画くに、劍を筏にして水を渉る図あり。権と劍との音相近し、故に劍を画くは、はやく鍾離権なるよしをしらせんとて也。これを上利劍とおぼえて、利劍に上る、仙人なりと思ふ人の為には、論ずるに及ばず<sup>25</sup>。鍾離権は後漢の人なり、字は叔道、和合子、また王陽子、雲房先生と号す。吐蕃を征して、その軍利あらず、深山に走り入て異人に遇、仙術を受、青龍劍法を得たるよし、『才子伝』、『列仙伝』等に見えたり。かゝれば亦劍に縁あり。（中略）又唐の世に、鍾離権といふ人ある歟、こは同名異人にこそ。

（文化5年・1808刊『俊寛僧都鳴物語』巻之6、17丁裏・18丁表）

某曾『才子伝』、『列仙伝』に拠りて考ふるに、鍾離権字は叔道、和合子、又王陽子と号し、又雲房先生と称したり。この人漢帝の命を受けて、吐蕃の羌胡を征伐せしとき、利を失ひて思はずも、山谷に走り入りて、異人に遭ふて仙術と、青龍劍の法を得たり。かゝれば

青龍劍の名目は、只一ト腰を指ていふ、劍の名にはあらずかし。(中略) 青龍劍は仙伝の、  
 法術の名なるべし。縦然る劍ありとても、今見る所は打刀也。劍は総て両刃にして、劈  
 き斫るを利とすれば、便和名をつるぎといへり。

(文政11年・1828刊『松浦佐用媛石魂録』後集卷之7、9丁裏・10丁表)

よく仙術を伝受して、鍾離権が青龍の、劍法までも得たりしかば、初は姑摩姫他們に及  
 ばず。  
 (天保5年・1834刊『開卷驚奇侠客伝』第3輯卷之1、13丁裏)

断片的な言及にとどまる『侠客伝』の記事はさておき、20年を隔てた『俊寛僧都嶋物語』と『松浦佐用媛石魂録』後集との記述を比較してみても、鍾離権やその青龍劍法に関して、両作の間に考証の深化は認めがたい。二つの読本はその考据として、いずれも「才子伝」と「列仙伝」とを掲げるが、これは『書言字考節用集』卷四・人倫門の「鍾離権」項と同一である。そもそも、両作に記された鍾離権の概要は、『書言字考』の記述を襲用したものと思しく、馬琴は『唐才子伝』や『列仙全伝』を繙閲することなしに、二つの読本で鍾離権を紹介した可能性が高い。

先に掲げた『嶋物語』の末尾で、馬琴が「唐の世に、鍾離権といふ人ある歟」と述べているのは、漢代の人であるはずの鍾離権が、『唐才子伝』の中にも現れるとした、『書言字考』の記述に疑義を呈したものであろう。『唐才子伝』の卷十には「呂巖」の一項があり、その冒頭には呂巖(洞賓)の師である鍾離権が紹介されているので、『書言字考』の注記はこれを指すと思われる。ともに現行八仙の構成員である鍾離権と呂洞賓との師弟関係を、馬琴が認識していたならば、必ずや『唐才子伝』の「呂巖」項にも注意が払われ、それに伴って上のごとき疑念は払拭されたに違いない。この点からも、文化期の馬琴が鍾離八仙に対して、さしたる知識を持ち合わせてはいなかったことが確認できる。

また、馬琴は『嶋物語』と『石魂録』とにおいて、鍾離権の字を「寂道」とするが、これは『列仙全伝』や『書言字考』などのように「寂道」とすべきものである。彼が二つの読本で同様の誤記を犯したのは、文政10年に『石魂録』の後集を綴る際、『書言字考』や『嶋物語』を参照したばかりで、他の書籍を確認しなかったことに起因するのかも知れない。

ここで念のため、『東遊記』における鍾離権の概要を確認しておこう。

鍾離名は権、燕台の人なり。後に名を覚と改む。字は寂道、和合子と号し、又王陽子と号し、又雲房先生とも号す。父列侯となり、雲中に宦たり。真人誕生するの時、異光数丈、状烈火のごとし、侍衛皆驚く。(中略) 昼夜声をなさず哭さず食さず。第七日、躍然として言ひて曰く、「身は紫府に遊び、名を玉京に書さん」。壮たるに及び、漢に仕へて大将たり。  
 (第11回)

鍾離その(稿者注、東華帝君の)言を聞きて、頓に大悟して曰く、「もし仙翁迷途を提醒するにあらざれば、身は一生終に塵網に陥るに幾からん」。因て以て老人に師事す。老人長生秘訣、金丹火候、青龍劍法を以て、悉く鍾離に授く。  
 (第16回)

上に見える鍾離権の一号「和合子」を、和刻本『列仙全伝』や『書言字考』は「和谷子」に作る。しかるに、『俊寛僧都嶋物語』はこれを「和合子」としており、この点において馬琴の記述は、むしろ『東遊記』と合致している。もっとも、鍾離権の本貫(燕台)や改名(覚)

といった、『列仙全伝』と『東遊記』とに共通する情報を、馬琴が顧慮していないことを思えば、『東遊記』の記述に基づいて、『書言字考』の「谷」字が「合」字に校訂されたとは考えづらい。のちの『石魂録』においては、『書言字考』と同様に「和谷子」と改められており、『鳴物語』における「和合子」は、不用意な誤記だったのではあるまいか。

以上のように、馬琴が著作の中で言及した「鍾呂八仙」の構成員は鍾離権1人であり、同人に対する考証も、おそらくは『書言字考節用集』のみに基づく安易なものであった。『曲亭蔵書目録』によると、馬琴は『列仙全伝』（和刻本であろう）を所持していたが、鍾離権の概要を説明する際に、同書を参照した形跡は見受けられない。かくのごとき状況を勘案しても、馬琴が「鍾呂八仙」に対して特別な関心を寄せ、里見八犬士を造形する際にもこの集団を念頭に置いたとする仮説は、容易に成り立ちえないのである。

## おわりに

『八犬伝』の本文最終巻である巻之53上は、その稿本が早稲田大学図書館に現存し、そこには本稿冒頭に掲げた「八犬仙山中遊戯図」の下絵（図7）も含まれている。この画稿で目を引くのは、犬江・犬塚・犬坂の3犬士のみが、髭のない若やいだ顔貌で描かれていることである。たしかにこの3人は、長禄3年（1459）生まれの犬田・犬川・犬山・犬飼の4犬士に比べると若年であるが、文明7年（1475）に生まれた親兵衛は別格としても、毛野は寛正6年（1465）、信乃は大角と同じ寛正元年（1460）に出生しており、年長の4犬士との年齢差は決して甚大なものではない。してみれば、件の下絵において、特に信乃と毛野とが「老仙」でないのは、やはり両人が幼少期に女装の経験を有したと関連するのであろう。

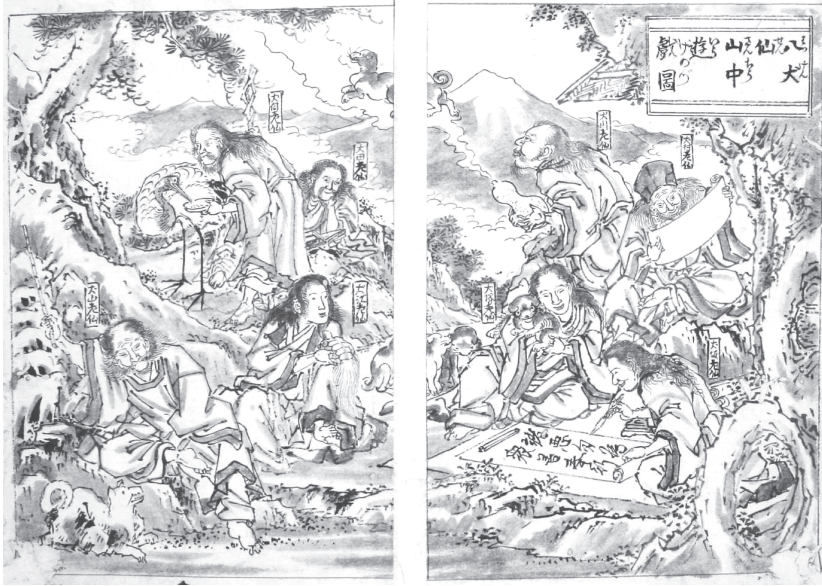
公刊された板本においては、信乃と毛野のみならず、親兵衛もまた老仙に改められており、各人の名前が傍記されていなかったならば、各々の犬士を判別することは難しい。図7において件の3犬士が若々しく描かれているのは、すでに明を失っていた作者馬琴の意図によるものか、あるいは画工重信の賢しらなのかは判然としないが、上木に際する改稿は、馬琴の意図を反映したものと見るべきであろう。

金碗孝徳の後身である聖僧、大は、八犬士が等しく有した牡丹型の痣について、物語の終盤で以下のように説明している。

牡丹は皆牡丹のみにして純陽の花也。（中略）約莫這八個の弟兄は、皆男子なれば純陽なり。且各身に在る所の痣子、形状牡丹の花に似たるは、那八房に類る兀自、亦是弟兄純陽の義を表せし也。しかれども、陽は独不立、陰は独不行。この故に犬阪・犬塚は、幼少き時より故ありて、俱に女装して、名も亦信乃・毛野など、女子に似たるは、亦是陽中の陰也。

（第9輯巻52、13丁裏・14丁表）

信乃の婚約者浜路や大角の妻雛衣が、「虚花」として非命の最期を遂げねばならなかったと同様に、本来は「純陽」であるべき八犬士において、女装2犬士の存在は「陽中の陰」、すなわち本質的ならざるものであった。対管領戦終結ののち、それぞれ「犬塚信濃介金碗成



【図7】『南総里見八犬伝』第9輯巻53上、挿絵画稿

孝<sup>たか</sup>「犬阪下野介金碗胤智<sup>しもつけのすけ たねとも</sup>」と改名した信乃・毛野の両人は、名乗りの上でも「女装<sup>をんなよそび</sup>」していた幼き日の痕跡を喪失している。よって、件の「山中遊戯図」においても、特に犬塚・犬阪の2犬士が、女性と見紛うばかりの若々しい姿で描かれる必然性は見出しがたい。

そもそも「八犬仙」とは、功成り名遂げた里見八犬士が、主家の衰亡を予見して、山中に身を退いた後の姿である。これは『東遊記』における「戦う神仙」としての八仙はもとより、画題として定着した「八仙慶寿」の明るく若やいだ八仙とも趣を異にしている。

謝肇淛は『五雑組』巻8の中で、巷間もて囃される八仙について、「皆列仙伝に採拾して、強ひて之に合はするのみ」と、さしたる由来のない集団であることを看破した。さらに同人は、正史に見える方士の張果が仙人でないことや、呂洞賓の作と伝えられる詩が、多く後人の傳会と思われることをも指摘している。

馬琴も早くからこの『五雑組』を愛読しており、若き日には同書から数多の記事を書き抜いて、『曲亭間記』と題する雑録(早大図書館曲亭叢書)を編んでいる。ただし、題簽に「曲亭間記 三」とあるこの抄録本は、原本巻11以降の記事のみを収めるものであり、件の八仙に関する記述は含まれていない。また馬琴は文化初年、すでに稀少となっていた同書和刻本の初板本(寛文元年・1661刊)を、二両の高値で買い入れており(天保7年10月26日篠斎宛書翰)、彼の『五雑組』に対する愛着は、ひとかたならぬものであった。

よって、仮に馬琴が「鍾呂八仙」に興味を抱いたとしても、『五雑組』における八仙考証は、必ずや彼に反省を促したことであろう。謝肇淛が「しばしば人間に降り、恋恋として舍るに忍びざる」と評した呂洞賓の行状なども、八犬仙の範とすべきものとは思われない。唐土の八仙と里見八犬士との間には、員数の一致や部分的な共通点のみでは容易に乗り越えられない、本質的な差異が存するようである。

本稿を綴りながら、常に稿者の胸中を離れなかったのは、近時徳田武氏がものされた、以下のごとき言説であった。

近來の幾つかの『八犬伝』論は、この作者自身の言及を殆ど解析すること無く、却って作者がどこにも言及してもいないことを持ち出して、「隱微」（中略）の解明と称して、奇妙奇天烈な作品論を展開するものが多い。そうした恣意的な論は、一般読者や評論家の作品論としてならば許されるかも知れないが、資料的・考証的な手続きを踏むべき研究者としての作品論であるならば、本末顛倒したものと謂わねばならない。

（『南総里見八犬伝』論（一））。江戸風雅6。平成24年）

馬琴は学者でもなければ魔術師でもなく、あくまで化政天保期に江戸の地で活動した小説作者であった。そのような馬琴に、今日我々が目にするごとき八仙図の知識を強制するのは、「奇妙奇天烈な作品論」であり、彼が「どこにも言及してもいない」鍾呂八仙は、八犬士の「隱微」な粉本などではあり得ないと思われるのである。

#### 注

- 1 本文中では、第4～29回のみ「第×回」と標記され、他の部分には回次が記されていない。また、目録と本文とで、各則の見出しに相違がある。
- 2 周曉薇『四遊記叢考』（2005年、中国社会科学出版社）第2章参照。
- 3 古本小説叢刊第39輯（1991年、中華書局）に影印、明代小説輯刊第3輯4（1999年、巴蜀書社）に翻刻。また、蕭相愷『珍本禁毀小説大観』（1998年、中州古籍出版社）によると、南京図書館には後印と思しき不全本（4分冊）が伝存する。一方、柳存仁「四遊記的明刻本」（『和風堂文集』下冊所収。1991年、上海古籍出版社）は、版式の異なるブリティッシュライブラリー蔵本を明刊残欠本とするが、磯部彰氏はこれを清刊本と推定している。磯部氏『『全像東遊記上河八仙伝』と『全像華光天王南遊志伝』の版本について—『四遊全伝』版本考之二—（『西遊記』受容史の研究）所収。平成7年、多賀出版）参照。
- 4 明治17年12月、齊東野人序。本文85頁、挿絵3葉。八仙列伝は鉄拐・漢鍾離のみを訳出し、第19回から第47回（本稿梗概のC～J）を省略する。出版元の兎屋（望月）誠は、松村操（明治17年没）による白話小説の訳本を複数刊行した書肆である。石塚純一氏は「『うさぎ屋誠』考—明治初期のある出版人をめぐって」（札幌大学文化学部紀要・比較文化論叢5。平成22年）の中で、本書の訳者根村熊五郎について、「あるいは望月誠のペンネームかもしれない」としておられる。
- 5 引用は、魯迅古小説研究著作四種『中国小説史略』（1997年、齊魯書社）に拠る。
- 6 『東遊記』と先行文芸との関連については、二階堂善弘氏「八仙過海故事の変容」（『明清期における武神と神仙の発展』）所収。平成21年、関西大学出版部に詳しい。
- 7 新版日本隨筆大成第1期1（昭和50年、吉川弘文館）、38頁。
- 8 大庭脩氏「東北大学狩野文庫架蔵の御文庫目録」（関西大学東西学術研究所紀要3。昭和45年）に翻刻。
- 9 関西大学東西学術研究所資料集刊7『舶載書目』（昭和47年、同研究所）に影印。
- 10 宗政五十緒氏「本派本願寺大谷家所蔵の小説稗史類」（『近世京都出版文化の研究』）所収。昭和57年、同朋舎出版）に翻刻紹介。『外典目録』と大谷文庫本との対応については、中田篤郎氏「南満州鉄道株式会社大連図書館旧蔵「大谷本」淵源」（龍谷史壇98・101・102。平成3・6年）や、大塚秀高氏「大連図書館「大谷本」稗史小説について」（中国古典小説研究9。平成16年）に詳しい。
- 11 鳥居久靖氏「秋水園主人「小説字彙」をめぐって」、同「日人編纂中国俗語辞書の若干について」（天理大学学報16・23。昭和29・32年）。
- 12 積玉圃和泉屋喜兵衛が、懐中謄本の裏面に書き付けたもの。弥吉光長氏『未刊史料による日本出版文化』2（昭和63年、ゆまに書房）史料編に翻刻。同氏『江戸時代の出版と人』（昭和55年、日外アソシエーツ）にも、分類

改編した形で収録されているが、前者との間に異同がある。

- 13 内題「新刻時調説唱八仙縁」。4巻12回。大英図書館所蔵の道光己丑(9年。1829)刊本が、『古本小説叢刊』第5輯(1990年、中華書局)に影印される。この小説は、関西大学図書館中村幸彦文庫にも伝存する。
- 14 国内に伝存する小本『四遊記』は、各作二分冊で合計八冊のものが多く、いずれも東・西・南・北の順に配置されている。
- 15 荒俣宏氏『本朝幻想文学縁起』(昭和60年、工作舎)、174頁。ただし、稿者もかつて小説『帝都物語』を愛読した一人であり、荒俣氏の学識には敬服していることを申し添えておきたい。
- 16 初出は昭和29年。『近世小説・営為と様式に関する私見』(平成5年、京都大学学術出版会)所収。
- 17 中尾和昇氏「関西大学図書館蔵小津桂窓『西荘文庫目録』一解題と翻刻一」(千里山文学論集85。平成23年)。なおこの目録には、夙に木村三四吾氏も言及しておられる。木村三四吾著作集Ⅱ『滝沢馬琴一人と書翰』(平成10年、八木書店)、9頁等参照。
- 18 一名「西遊記釈諭」。同書の概要は、薛亮『明清稀見小説匯考』(1999年、社会科学文献出版社)142頁以下にまとめられている。それによると、同作は主人公盧生の「東遊」を、史上人物の「淫逸無度」な故事を交えつつ語ったもので、その作風は「猥褻過甚」であるという。「顧道民脱稿 客夫人校字」とあり、各章末には「竹坡」の評を付すが、天啓帝の乳母客氏はもとより、『金瓶梅』の評者張竹坡もまた後人の仮託であろう。
- 19 津市石水博物館現蔵。この資料は、神谷勝広氏の口頭発表「馬琴の自作批評—石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』—」(日本近世文学会平成24年度秋季大会)において広く紹介された。
- 20 馬琴が桂窓から『八洞天』を借覧した経緯は、拙稿「『女郎花五色石台』典拠小考」(『馬琴と書物』所収。平成23年、八木書店)の中に整理した。
- 21 小本『紅樓夢』の借覧については、拙稿「才子佳人小説『二度梅』と馬琴」(『馬琴と書物』所収)参照。
- 22 本節における図像の検索には、下記のデータベースが極めて有用であった。
  - ・金沢美術工芸大学付属図書館「近世絵手本画譜類画像検索データベース」  
(<http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/tosyokan/edehon/main1.htm>)
  - ・日野原健司氏「江戸時代絵本・画譜・絵手本序文・跋文・画題データベース」  
(<http://d.hatenane.jp/HINOHARA/>)
- 23 『絵本手鑑』と同じ大岡春卜の『和漢名画苑』(6巻6冊。寛延3年・1750刊)巻5に収められた、狩野尚信描く八仙図には、8人の老仙と、鳥に乗って飛来した仙女とが描かれており、画者尚信の八仙に対する理解も、今日通行のものとは異なるようである。
- 24 趙景深「八仙伝説」。『中国小説叢考』(1980年、齊魯書社)所収。
- 25 馬琴は『嶋物語』の中で、鍾離権を「上利劍」とする愚を論うばかりであるが、大田南畝は『南畝莠言』(文化14年・1817刊)において、王昌会『詩話類編』の記事を紹介し、「劍に乗る仙人」は鍾離権ではなくして呂純陽(洞賓)であろうと考証している。南畝のこの見解は、呂洞賓の「暗八仙」が劍であることとも照応しており、注目に値する。

## 《付記》

本稿は、東京外国語大学国際日本研究センター国際シンポジウム「曲亭馬琴をめぐる三つの提題—白話文学・演劇の表象・ベトナム文学」(平成23年12月15日)における口頭発表「化政天保期の『江戸作者』馬琴」に基づくものである。発表に際しては、友常勉先生をはじめとする同センターの各位から、ひとかたならぬご高配にあずかった。末筆ながら、厚く御礼申し上げます。

## Chinese “Eight Immortals” and “Nanso Satomi Hakkenden”

Masayuki KANDA

Meiji University

【keyword】 Kyokutei Bakin, Nanso Satomi Hakkenden, Eight Hermits,  
wakan Comparative Literature

Satomi Hakkenshi( 里見八犬士 ), the heroes of the tale “Nanso Satomi hakkenden( 南総里見八犬伝 )”, became hermits at the end of the story. After Hakkenshi retired in Toyama( 富山 ), Bakin, the author the tale, called them “eight dog hermits( 八犬仙 )”. In terms of the group of eight hermits, it is usual to recall Chinese “Eight Immortals( 八仙 )in Chinese literature.” In this paper, I investigate a possibility that Bakin bore “Eight Immortals” in mind, when he wrote “Nanso Satomi hakkenden”.

“Ba Xian Chu Chu Dong You Ji( 八仙出処東遊記 )” is a Chinese classical novel in which Eight Immortals was focused. That story is composed of three stages: “their biographies,” “visiting nobles” and “great war”. It shares with “Nanso Satomi hakkenden”. However, if we scrutinize the handwritten manuscripts of Bakin, the evidence in which he read “Dong You Ji” cannot be acquired. The resemblance of two novels, supposedly, should consider “accidental coincidence”.

In addition, in all the Bakin’s novels, any mention of Eight Immortals is not found. Furthermore, it was only Zhongli Quan( 鍾離權 )that Bakin mentioned the member of Eight Immortals. Besides Bakin’s knowledge of Zhongli Quan just came from a dictionary and which should be superficial.

In the late of Edo period when Bakin worked, many variants of Eight Immortals tales but of different members were introduced in the publications. Therefore, the Eight Immortals that appeared in “Dong You Ji” was not realized as the sole version of the story in the Edo period. Thus, we should be careful for the conventional understanding in Bakin study, in which a composition of Eight Immortals of “six men and two women” is easily to associated with Satomi Hakkenshi, even if it included two disguised female warriors.